

されど フランス 映画

*Bel espoir pour
le cinéma français*

文 = 遠藤突無也

映

画の衰退が叫ばれて久しい。原因は、いくつか考えられるが、結局は、製作者と劇場の問題になっていく。映画で儲けたい……こういう発言を色々な業種の人たちが口にし始めた頃から、日本では、利益優先の映画が目立ち始めた。フランスも御同様に、今では、外国に売る事ばかり考えた映画が多くなり、荒れ果ててしまったと嘆く人も多い。

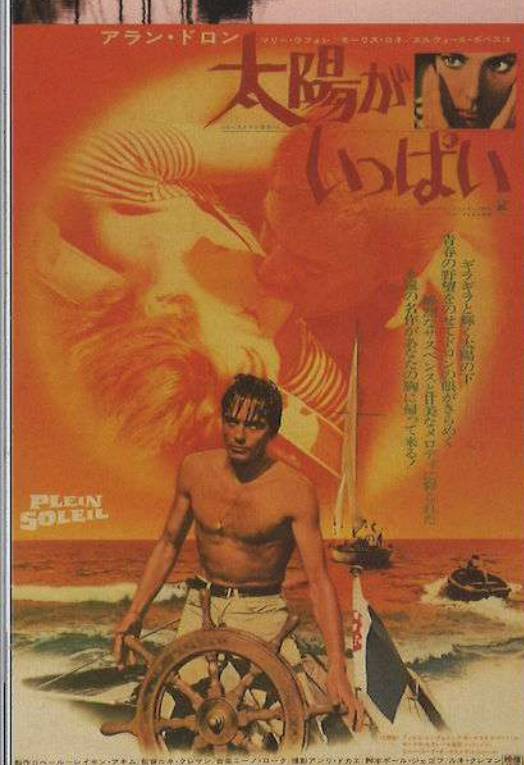
今や、日本でのフランス映画は、限りなくマラックと括られていて、それは、シャンソンというジャンルにも重なる事が出来る。例えば、「エマニエル夫人」(1974)の頃までは、映画主題歌を、日本語カバーで、シングル盤まで出す歌手がいて、まだ一般にシャンソンの受け入れられる素地が残っていたものだ。だから、フランス映画と日本のシャンソンは、衰退というワードで関連づけられるのだ。

日本では、「エマニエル夫人」の超大ヒット以降「アメリ」(2001)まで、外国映画として、ハリウッド映画に肩を並べるヒット作品はなく、やっと「最強のふたり」(2011)が出現したときには、フランス映画ファンとしては、ほっとしたものである。今更46年も前に公開された「エマニエル夫人」が、日本で実質的に一番ヒットしたフランス映画だということも、淋しい気もするが、それでも割合、話題作は、何かの形で上映はされている。

私は、フランスと日本を往復するようになってから、日仏映画のポスターを、比較文化として集めたが、そのポスターが、縁で、この夏から秋にかけて、数か所でポスター展と講演(一部は公演)を行う予定だったが、このウィルス騒ぎで、全部来年にまわってしまった。今日は、この件で知り合った人達、具体的には、ラ・ロシェル映画祭とジャン・ドラノワ映画記念館の関係者の話をしたい。



ラ・ロシェルは、フランスの西海岸に位置する港湾都市。



フランスには、実に多くの映画祭があるのを御存知だろうか？

日本では、カンヌ映画祭ばかりが強調されるが、ラ・ロシェル国際映画祭は、過去の偉大なる監督の業績へのオマージュと、現代の気鋭の新人の作品を上映する2本の大きなコンセプトからなる国家的なフェスティバルである。

規模的には、カンヌに次ぐ大きなものだが、この映画祭には、コンペティションがない。したがって、国と国との思惑がぶつからず、カンヌの様に、政治や権力に左右されない、映画への愛に満ちた映画祭である。

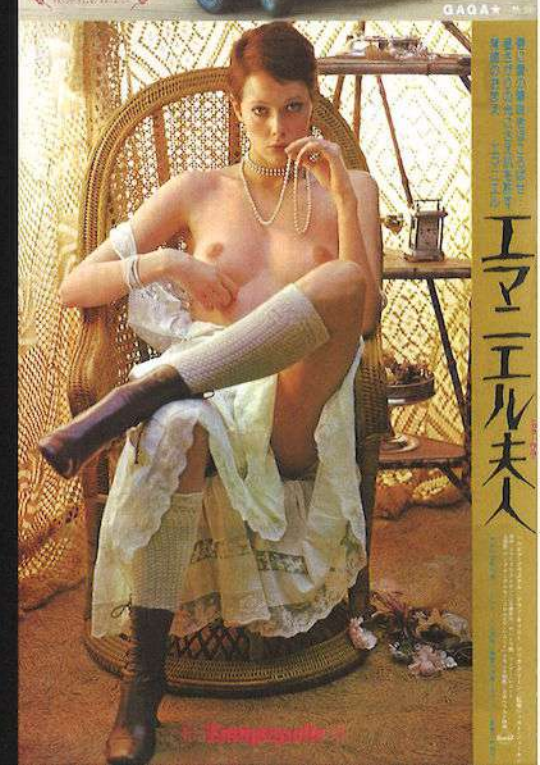
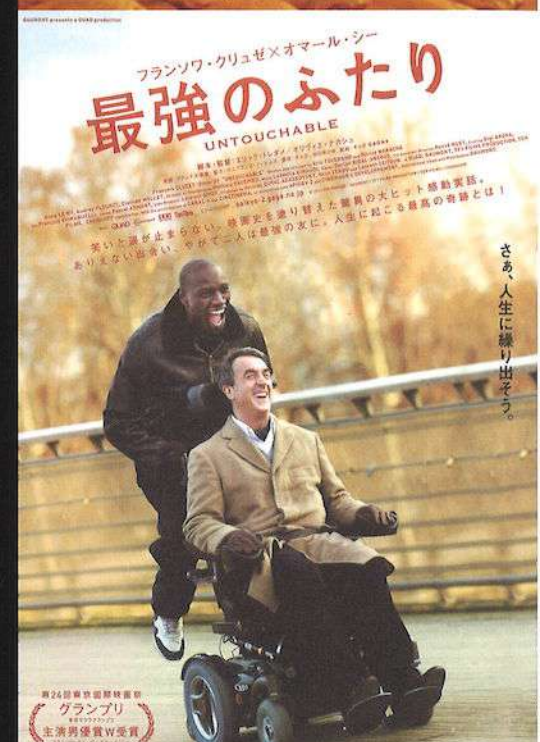
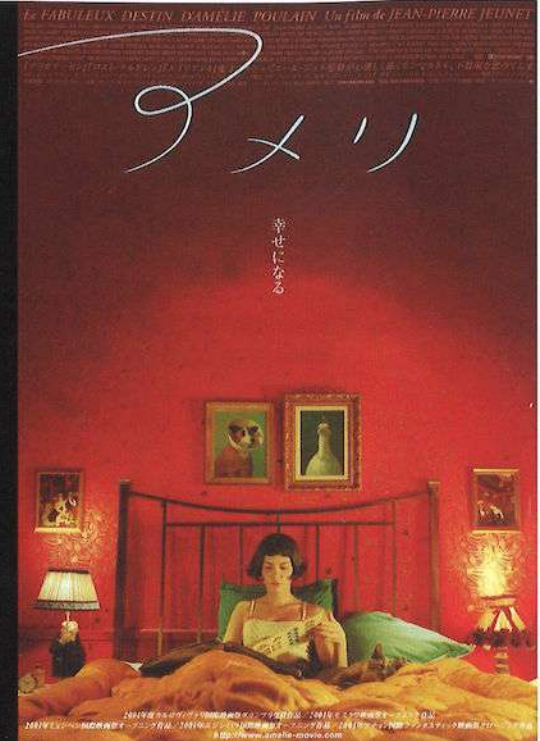
今年も、ルネ・クレマンとロベール・ロッセリーニが2大柱になるはずで、その特別展示として彼

等の映画のポスター展があり、私の所蔵するポスターも、そこで展示の予定だった。もう一つ目玉となるはずだったのは、「一隻のボート。A・ドロンの名を決定付けた、クレマンの傑作「太陽がいっぱい」で使用された、富の象徴である。クレマンは、日本では「禁じられた遊び」(1952)や「太陽がいっぱい」(1960)で知られ

るが、戦後すぐナチスへの抵抗運動が主題の映画「鉄路の闘い」(1946)でデビュー。その後、スヴェル・ヴァーグが登場しても、彼らには絶対におもねらず、淡々と商業映画を撮り続けた巨匠である。

ラ・ロシェル映画祭のパーティ事務所は、バスティーユ広場の近

くにあり、私のアパートからも散歩圏内。ソフィーとアルノーというコンビが出迎えてくれたのだが、二人は、どうみても学生にしか見えなかった。長い間在任したTOPが退官したために、アシストから繰り上がったという二人だったが、かなりの決定権を持たされていて、その若さで、よくこれだけ大規模な国際映





ジャン・ドノワの『第七の男』 新宿劇場

画祭を仕切れるな、大丈夫かな？というのが第一印象。しかし、ものの数分で、その杞憂は払拭された。テキパキと、小気味よく段取りを指示して、しかも失礼ではない。瞳には、映画の仕事ができる喜びがキラキラしている。ああ、こういう若い人たちが、これからの映画祭を引っ張ってゆくのだなと、何処までもさわやかな彼らを応援したくなった。

もう一つの「ジャン・ドノワ映画記念館」では、逆に老人パワーを見せつけられた。ジャン・ドノワ：実は、現在この大監督の評価は、決して高いとは言えない。むしろ忘れ去られてしまったというべきか。2008年に彼はガンヴィルで亡くなったが、日本の新藤兼人と同じく100歳という天寿を全うした。生涯で沢山の映画やTVドラマを演出したが、もともとは俳優だったという。コクトーがプロデュースした「悲恋」(1943)が世界的なヒットとなり、戦前から戦後にかけては、飛ぶ鳥を落とすほどの勢いだったが、ヌーヴェル・ヴァーグの出現で地に墮とされた。現在でも、評論家からは厚遇されていない。しかし、特に日本の往年のフランス映画ファンにとっては、デュヴィヴィエやカルネに次いで懐かしい大監督に違いない。

「悲恋」(1943)が世界的なヒットとなり、戦前から戦後にかけては、飛ぶ鳥を落とすほどの勢いだったが、ヌーヴェル・ヴァーグの出現で地に墮とされた。現在でも、評論家からは厚遇されていない。しかし、特に日本の往年のフランス映画ファンにとっては、デュヴィヴィエやカルネに次いで懐かしい大監督に違いない。

画やTVドラマを演出したが、もともとは俳優だったという。コクトーがプロデュースした「悲恋」(1943)が世界的なヒットとなり、戦前から戦後にかけては、飛ぶ鳥を落とすほどの勢いだったが、ヌーヴェル・ヴァーグの出現で地に墮とされた。現在でも、評論家からは厚遇されていない。しかし、特に日本の往年のフランス映画ファンにとっては、デュヴィヴィエやカルネに次いで懐かしい大監督に違いない。

彼

の美術館は、ピエ
イユという、聞いた

こともない村にあるという……この村は、パリから急行で約一時間のところにあつた。地図上ではフランス北部ノルマンディーにあり、冬は大変に寒い。ドノワの亡くなったガンヴィルの隣村だが、駅に着いて驚いた。駅員は、ゼロ。人の姿は見えず、何頭かの牛



が、私を珍しそうに見て、モーツと鳴いていた。駅の前に、いきなり人家があり、すぐ後ろは農園。二心人口1600人とあるが、カフェひとつない。唯一の名物であろう、美術館は、目の前にあり、二見、何かの工場かと思つたが、其れもその筈、昔は、戦闘

機を作つていたという。私は、展覧のテーマである、脚本家ミシェル・オディアールの参加した作品とドノワの作品の日本版のポスターを何枚か、持つていったが、一瞬、早まったかな？と思つた。イメージ的には南京錠がかかっているような、美術館とは名ばかりのバカでない工場。こんなところに貴重な

ものを、何か月も置いておいて大丈夫だろうか……。館長は、ド
ラノワの娘クレールで、会う前にはジョークで「ドラ娘」などと呼んでいたので、会つてみたら、何とも上品なマダムであつた。70歳以上な事は確かだが、長い間父親の秘書

をしてきたそうで、元飛行機工場がシャトーであるかのように思わせるエレガンスが身についている。少しすると、牛しかいないと思つた場所に、続々と老人たちがボロ車で登場。彼らは、この地方の映画愛好家で、ボランティアで働き、冬の間は、寒さで閉館するため、約半年間かけて、次の展覧会の準備をし、小道



ドラノワ映画記念館 カメラを調く
ドラノワ監督(左)と館長のクレールさん

具などを作るのである。丁度私が訪れた時は閉館中で、前回の特別展、フランス映画の映画美術家たち、ルネ・ルヌー他の有名な映画美術家たちのセツトの一部(「ノートルダムdeセむし男」(1956)、「マリーアントワネット」(1956)等)や、デッサンやポスターの展示が残されていて、クレールと手作り老人クラブの人たちが、これはあつたが運んだとか、これは僕が塗つたという感じに、説明したくうずうずして、騒がしい事、楽しい事。あつという間に時間が過ぎていった。

ド

ラノワは、確かなテクニクと教養に満ちた、第二級の監督であつたが、全盛時代のトリュフォーやゴダールに、完全に時代遅れのレッテルを貼られてしまつた。その後「メグレもの」など、沢山の佳作があるにも関わら



殺人鬼に罠をかける
吸血鬼ドラキョウ
新宿劇場

ず正當に評価されず、ただのスター映画を無難に撮る職人監督に括られてしまったのである。

これは、明らかに不当である。

実際に、ドラノワ作品が日本に与えた影響は、少なくない。サルトル原作の「賭けはなされた」(1947)は、あまり知られていないが、今をときめく是枝裕和がヴェネツィアで賞を取った「ワンダフルライフ」(1999)に影響大である。

ドラノワが一番大きな影響を与えたのは、「悲しみの天使」(1964)であろう。

この映画は、「寄宿舎」というタイトルで再公開されたが、神学学校少年たちの同性愛を描いた傑作である。そして、まだ漫画家の卵だった萩尾望都と竹宮恵子の行く先を決定づけた事で、日本漫画界と切っても切れない作品になった。萩尾と竹宮は、二人でこの映画を見に行ったという話が残されているが、その後萩尾はこの少年たちの世界をテーマに「十一月のギムナジウム」や「トーマの心臓」を描いた。竹宮は、同じく寄宿舎を題材に大長編「風と木の

詩」を描きあげた。

しかし話は、ここで終わらない。彼女たちの作品のテーマは、圧倒的に日本の婦女子の注目を浴び、少女漫画界の世界で、BLものという立場を獲得し、やがてそれは一般にも広がり、「ジャンルになっていた。先頃ちよつとしたブームになった」おっさんすラブ」(劇場版2009)も、このBLブームの下地が

あつたからのヒットであろう。

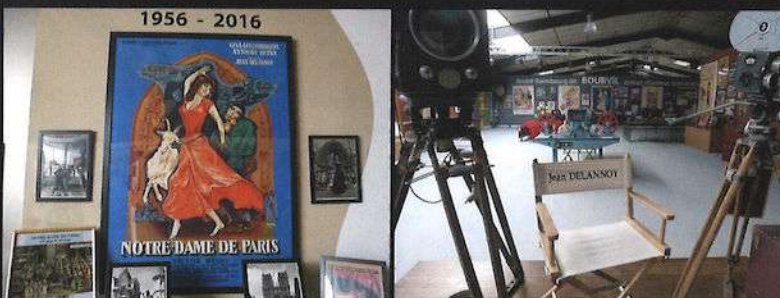
ク

ルールには、ここまで分析しては話せなかつたけれど、私が、ドラノワは日本で大変に人気があつたという、信じられないらしく、やはり彼の佳作である「首輪のない犬」(1955)のテーマを私が口ずさむと、びつくりし、少し涙ぐんでいた。クレールの涙には、悔しさが滲んでいた。

たけれど、父親の仕事に絶対のプライドを持つていて、それがこの田舎の記念館を支えている。そして、クレールを取り囲む老人たち……。彼らの誰もが、映画を語るときに、瞳をキラキラさせていて、すがすがしく愛に満ちていた。

私は、今回、知らずも、フランス映画の現状を知ることになつた。片や若者、片や老人なれ

ど、映画愛に満ちた人々。そして、その活動の大半を支えているのは、フランス国民の税金である。映画を文化として捉える。この国の懐は深い。温故知新……。新しさは古さを知らなくては生まれない。映画がTVに駆逐され、今は、ネット配信もあり、どれほど変わつていこうとも、この本質は変わらない。されどフランス映画。



ドラノワ記念館の外見と中の様子

©Musée Jean Delannoy JM

遠藤突無也 Tomuya Endo

東京生まれ。歌手、日仏映画研究家。90年代初頭からパリと東京を往復し、両国の優れた歌謡を唄い紹介することに情熱を傾けてきた。2007年、パリ・オランピア劇場でコンサートを成功させる。近年は代官山「晴れ豆」などのライブハウスで唄う。現在、YouTubeでライブ配信中。長年に渡り映画における日仏の比較文化を研究、集大成として2017年「日仏映画往来」を出版(同年、記念CD「Cinéma」をリリース)。他の著書に、フランス初の日本映画俳優辞典「L'Age d'Or du cinéma japonais/日本映画黄金期」(2018)、フランスで50-70年代に活躍した国際女優、谷洋子の人生を描いたノンフィクション本「パリの『赤いバラ』といわれた女」(2019/さくら舎)などがある。

